

教育長 様

校番 122 戸手 高等学校長  
( 全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る  
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校  
令和5年度 実施報告書**

**1 学校の教育目標等**

(1) 教育目標

「集う 学ぶ 拓く」(⇒学校に集い仲間と力を合わせながら、主体的に学び、自らの生きる道を切り拓く)

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

育てたい生徒像

「主体的に学び挑戦する生徒、地域に愛され地域に貢献できる生徒、自分と仲間を大切にする生徒」

育成を目指す資質・能力

「基礎・基本に基づく幅広い教養、気付く力、解決に向けて思考する力、論理的に相手に伝える力、仲間と協働する力」

(3) 学科等の特色

生徒一人一人の個性を大切にし、自分の進路をしっかりと見つめられるよう、5つの系列を設定し、“総合学科らしい総合学科”を目指して、生徒の個性や地域との連携を大切にしながら教育活動を進めている。

**2 研究の概要**

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

社会と自己を関連付け、課題を発見し解決していくための資質・能力の育成を目指す。

(2) 1年後の目指す学校の姿

①生徒の姿

- ・主体的に課題を発見し解決することができる。
- ・しなやかで折れない心もち、仲間と協力して活動することができる。
- ・広い視野と高い目標もち、努力し挑戦し続けて未来を切り拓くことができる。
- ・地域に愛され、リーダーシップを発揮しながら地域のために貢献することができる。

②教職員の姿

- ・生徒の多様性を認め、心に寄り添い、生徒・保護者から信頼される教職員集団
- ・生徒の個性を尊重し、主体性を引き出しながら学びをサポートする教職員集団
- ・目指す資質・能力の育成のために、教育内容や方法を工夫し実践することができる教職員集団

(3) 令和5年度の目標

ア アウトプット (活動指標)

2年間で明らかになった課題を、マスタールーブリックと単元ルーブリックに反映し作成する。それを教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、指導に活かす。

イ アウトカム (成果目標)

マスタールーブリックによる「基礎・基本に基づく幅広い教養」「気付く力」「解決に向けて思考する力」「論理的に相手に伝える力」「仲間と協働する力」の評価結果がレベル4以上である3年次生の割合が50%以上になっている。

#### (4) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

##### ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

3年次「総合的な探究の時間」

##### イ カリキュラム開発の概要

(マクロレベル)

各教科で、マスタールーブリックに示す5つの資質・能力の昨年度の育成レベルとそのために取り組んだ教育活動について振り返り、今年度どういった取組ができるか協議を行った。

(ミクロレベル)

核となる3年次「総合的な探究の時間」について、2年次で学んだ探究サイクルを活かし、主体的に探究活動ができるよう、以下のように変更し実施した。

##### 1. 指導体制

- ①各教科に紐付けてクラス編成をするやり方を撤廃し、10分野から選択していたものを4分野に統合
- ②該当の分野を選択している生徒の数によって教員数を比例分配
- ③1人の生徒を様々な教科の複数の教員が指導できるように、クラス制を廃止し分野ごとの担当に変更

##### 2. 授業後の振り返り

生徒の進捗状況を確認し指導しやすくするため、探究サイクルを活かした振り返りシートを毎時間提出

##### 3. STEAM教育の視点

各講座の担当教員が生徒に対してSTEAM教育の視点の説明を行い、生徒各自の探究内容が他教科のつながりと社会実装を意識したものになるよう、ワークシートを活用し指導した。また、教育研究部を窓口とし、各講座の外部連携を掌握することで、他教科の授業とのつながりも模索できた。

また、本年度研究した教科外国語(英語)において、シェアリングエコノミーを題材に、単元目標を「地域の人々が、生活に、より満足するためにどのサービスをおすすめしたいか、自分の考えを相手に分かるように伝えることができる」と設定し学習した。地域社会とつながる取組を行った総合的な探究の時間や他教科のあらゆる学びを総合的に活用し自分の考えを構築し英語で表現した。

##### ウ 校内体制

学びの変革プロジェクト会議を軸に取組や方向性について協議し、教育研究部で具体的内容について検討し、学年会や教科会で共有し実施した。また、STEAM教育や目指す資質・能力の育成を全体で進めていくため、6月に教科主任会議、8月に教員研修会、12月にSTEAM教育先進校視察報告会と全教科による公開研究授業を行い共通認識を図った。

#### (5) 学習評価

2年次実施のGPS-AcademicでA評価の割合が低かったため、3年次では、探究サイクルを活かした振り返りシートを毎時間提出させ学習状況の把握を行い、講座担当者間で情報共有し、指導・評価方法の修正を行った。なお、3年次はGPS-Academicを受けていないため、客観的数値として2年次と比較することはできず、生徒の自己評価で変容を見取った。

#### (6) カリキュラム評価

(マクロレベル)

今年度のマスタールーブリックでは育成を目指す資質・能力を図りにくい箇所があったので、教科主任会議、分掌会で修正を行い来年度に活かすこととした。

(ミクロレベル)

3年次の総合的な探究の時間における課題や指導方針について各教科で話し合った意見を基に、実施方法の変更を教育研究部で検討し4月に全体に提案した。2月に分掌会と講座担当者を中心にカリキュラム開発の妥当性を振り返り実施方法を再検討した。来年度の詳細について3月に全体に提案する。

### 3 令和5年度の成果及び課題

#### (1) 成果

5つの資質・能力のうち、主に「仲間と協働する力」と「解決に向けて思考する力」の2つの力について、現3年生の2年次と3年次の変容を分析した。

### 1. 「仲間と協働する力」

2年次は、GPS-Academicの結果ではA評価が12%、生徒の自己評価ではレベル3（2年次目標レベル）が47%であった。3年次は、生徒の自己評価ではレベル4（3年次目標レベル）が58%と向上した。生徒の振り返りとして、「個々の得意不得意を補うために役割を分担してお互いに支え合いながら作業ができた」「個人探究だったが、途中でチームでやっている別の人に探究についての意見を求めた時に、自分では考えていなかった新しい意見が出たので、仲間と協働して課題解決に取り組むことが必要であることは理解した」等の記述が多かった。これらは、2年次に実施した、教員から提示された課題の取組から生徒の興味・関心に基づいた探究活動にしたことで、意欲的に協働学習ができたと考える。

### 2. 「解決に向けて思考する力」

2年次は、GPS-Academicの結果ではA評価が3%と大きく低かったが、生徒の自己評価はレベル3（2年次目標レベル）が30%であった。3年次は、生徒の自己評価ではレベル4（3年次目標レベル）が36%であった。生徒の振り返りとして、「ただ単に課題を解決するだけでなく、理由や具体的な根拠を考えることができた」「自分の課題を見付け、様々な視点で物事を見て、客観的に考えて最適解を割り出せるようになった」等の記述が多かった。これは、2年次から継続して行ってきた探究サイクルを回す探究方法がある程度定着できたと考える。

## (2) 課題

成果同様、主に「仲間と協働する力」と「解決に向けて思考する力」の2つの力について、現3年生の2年次と3年次の生徒の文章表記による自己評価で変容を分析した。

### 1. 「仲間と協働する力」

2年次は、「統一性のあるスライドにするために、もっと班の人と話し合うべきだった」等、1つのものを協力して作り上げる難しさを述べる記述が多かった。3年次は、「一人で探究をしたので共同作業がなかった」「何人かで探究をしたいと思っていたが、結局仲間との協働はできなかった」等の記述があり、生徒の興味・関心を基にした個人探究は大事であるが、その一方で、他者と協力せず探究を進め、個人で考えを終結してしまう生徒も一部いた。

### 2. 「解決に向けて思考する力」

2年次は、「情報収集が不十分で内容が薄かった」「解決案を考えるのが難しかった」等、また、3年次は、「こうしたい、ああしたいはあるものの、具体的にどうすればよいかかわからなかった」「あまり論理的には考えられなかった」等の記述があり、論理的に解決策を導き出すまで探究サイクルを何度も回す難しさを実感している生徒が多かった。

「仲間と協働する力」以外は、成果目標として掲げた数値には届かなかったが、(1)成果と(2)課題の生徒の記述から、自分の強みと弱みが把握でき、今後どのような力が必要か自覚できたことは大きい。卒業後必要だと思う力は何かとの問いに、「仲間と協働する力が必要だと感じる。他の人に意見を聞くことで、より良い課題の解決方法を見いだせることも多く、お互いに意見を共有することは、自分本位ではなく相手の考えも受け入れて行動できる」等の意見が多かった。生徒の気づきを教員全体で共有し、どのように活かしていくかが課題である。

## 4 令和6年度の研究目標及び取組内容

### (1) 令和6年度の研究目標

#### ア アウトプット（活動指標）

3年間で明らかになった課題を、マスタールーブリックに反映し作成する。それを、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、指導に活かす。

#### イ アウトカム（成果目標）

マスタールーブリックの「基礎・基本に基づく幅広い教養」「気付く力」「解決に向けて思考する力」「論理的に相手に伝える力」「仲間と協働する力」について、文章表記によって振り返り、自分の強みと弱みがきちんと認識できる生徒の割合が70%以上になっている。

### (2) 令和6年度のカリキュラム改善の内容及び校内体制

#### ア カリキュラム改善の概要

現在の探究活動は課題設定までに多くの時間がかかり、探究サイクルを1年間の中で完結できていない場面も見られる。また、生徒各自の探究テーマが「総合的な探究の時間」のテーマとして掲げた「地域や社会に貢献する」ものになっていない場合も多い。これらの問題を解決し生徒が主体的に探究を進めるために、事前に生徒・関係者と相談し、その意見に基づいて取り組む課題を設定し探究を進めていく。そこに携わる外部人材を計画的に活用することによって計画の実行・検証が可能であると考えられる。

取り組む探究課題は次の3つを提示する。①自身が感じている地域課題 ②担当予定教員と生徒で話をしていく中で決定した地域課題 ③地域の人と生徒が話をしていく中で決定した地域課題  
留意点として、教科指導ではなくSTEAM教育を行う上で適当であると考えられること、具体的な解決方法の提案が可能であると考えられるもの、現在存在している実際の課題であることを挙げる。

イ 校内体制

学びの変革プロジェクト会議および教科主任会議を軸に取組や方向性について協議し、教育研究部で具体的内容について検討し実施していく。